

特集

# 韓国外交研究の新地平

木宮正史

(東京大学)

本号の特集は「韓国外交研究の新地平」である。この特集タイトルの含意は以下の3点である。

第一に、1994年の第1回公開以後、30年ルールに従って、現状では1980年分まで公開された、韓国外交史料館所蔵の韓国政府外交文書を積極的に利用した実証的な研究を目指すという点だ<sup>(1)</sup>。1980年分まで公開されているので、日米などと比較しても、最も新しい時期の外交文書が公開されていると言っても過言ではない。1980年代、権威主義体制下において、利用できる一次史料が非常に限られたものであったこと、さらに、主として米国の外交史料に依存した韓国の政治外交に関する研究が幅を利かしていたことを想起すると、隔世の感がある。また、従来、韓国政府の外交文書を利用した韓国外交に関する研究は、主として、日韓国交正常化や韓国軍ベトナム派兵などを中心とした1960年代に焦点が当てられてきた。しかし、1970年代の外交文書がほぼ全面的に公開されることで、今後は、1970年代の韓国外交に関する研究に拍車がかかることが予想される。1970年代は、米中接近や日中国交正常化など、東アジア国際関係における激動期であった。こうした緊張緩和の動きに南北朝鮮とも何らかの対応を余儀なくされ、その中でいろいろな可能性が模索された。にもかかわらず、少なくとも結果として、緊張緩和の配当が朝鮮半島にもたらされたとは言い難い。なぜ、そうした帰結がもたらされたのか、また、どのような可能性があったのかなど、依然として未解明の課題は山積みされている。こうした「謎」を解明するためにも、韓国政府外交文書を十分に活用した、実証性の高い韓国外交の歴史研究が期待される。

韓国外交に関しては、狭義の外交官<sup>(2)</sup>、さらには、大統領などの政治家<sup>(3)</sup>も含めて、比較的多く

の回顧録、自伝の類が刊行されている。韓国外交研究に関しては、従来は、こうした回顧録などへの依存度が高かったように思う。ただ、周知のように自伝や回顧録の類は、どうしても客観性という点で問題が残る。そうしたものに依拠しただけで、真実とは必ずしも合致しないかもしれない「神話」が作られることもある。そうした「神話」を脱構築するためにも、韓国政府外交文書、さらには、その他の国の外交文書などに基づく実証研究の活性化が必要だと考える。

第二に、米韓関係、日韓関係、南北関係だけに還元されない、韓国外交の「多面性」に焦点を当てるということである。従来の韓国外交研究は、何よりも、米韓関係、日韓関係、そして厳密には外交関係とは言い難いかもしれないが、南北関係に関心が集中してきたように思われる。「脱植民地化・冷戦体制下において南北間の競争に勝ち抜いて韓国主導の統一を勝ち取る」という、韓国が直面した課題を前提とすると、韓国にとって日米との関係、そして南北関係が重要であることは言うまでもないことであり、そうした分野に研究が集中するのは当然の結果である。

但し、韓国外交がそれだけに集約されるかという疑問符がつく。もちろん、1980年代後半以降、冷戦の終焉と歩調を合わせた、韓国の北方外交、韓ソ国交正常化、中韓国交正常化などに関する研究も、回顧録などに依拠して行われるようになっていく。しかし、それは多くの場合、1980年代以降の時期を対象としたものであり、それ以前に関しては、依然として対日米関係、南北関係に関する研究が大部分である。ところで、韓国政府外交文書は、日米との関係に関するものの分量が多いことは言うまでもないが、それだけには還元されない、さまざまな文書が存在する。そうした外

交史料を利用することで、日米との関係や南北関係だけには限定されない、韓国外交の「多面性」を再照射することが可能になるし、また、そうすることによって新たな知見が得られるのではないかと考える。

第三に、現代的含意を持つ韓国現代史、韓国外交史の再解釈の試みである。韓国現代史の解釈が、時間の推移と共に大きく変わってきたことは、歴史が現在との対話という側面を持つ限りは当然のことだ。朝鮮半島をめぐる国際政治が依然として不安定、不透明であることは衆目の一致するところである。目の前の現状をどのように分析するかということは研究者に課せられた重要な任務である。そのために、いろいろなアプローチがありうるが、過去の歴史を引照するということが一つの重要な方法である。朝鮮半島の現状がどのような政治力学に基づいて形成されてきたのか、そして、その中から、何が現実を動かしているのかを解明することは、現状分析にとっても重要な貢献を果たし得ると考える。

特集に関しては投稿論文を募集したが、募集期間が短かったためか、残念ながら、特集に対する投稿論文は1本もなく、結果として3本の依頼論文で構成される。

木宮正史「朴正熙政権の対共産圏外交—1970年代を中心に」は、主として、1970年代の韓国政府外交文書のうち、対共産圏関係部分を参照して、従来、ほとんど焦点が当てられなかった、1970年代朴正熙政権の対共産圏外交を、対中ソ関係と対東欧関係に分けて論じたものである。米中接近など東アジア国際政治の変容に直面した韓国政府が、中国の「台頭」という、韓国にとっての危機を最小化して、それまで実質上封印されていた対共産圏外交を展開する過程を明らかにしようとした試みである。

劉仙姬「朴正熙政権における対国連外交(1969-76年)」は、外交文書の中でもかなり重要な比重を占める国連関係の文書を主として参照して、中国の国連「加盟」、米中和解などによって、朝鮮半島問題をめぐる国連の関与に変容が余儀なくされる中、韓国がどのように国連外交を展開していったのかを実証的に明らかにしようとしたもの

である。結果として、朝鮮半島問題は「脱国連化」することになるのだが、韓国政府が単に自国にとって有利ばかりではなくなった国連の場を回避するというだけでなく、国連の「利用価値」を再検討していく過程を実証的に明らかにしている。

以上の二本の論文は、1970年代の韓国政府外交文書を利用したものであるが、金淑賢「韓国の北方外交の概念と進展、そして評価」は、外交文書が未公開の1980年代後半から90年代に展開された韓国の北方外交に関して、その政策がどのように生まれ、どのように進展したのか、そして、それをどのように評価するべきかを論じたものである。韓国外交に関する実証的研究というよりも、北方外交の展開過程を概観したうえで、その政策評価に力点を置いたものであり、その政策の成果の肯定・否定の両面性を明らかにしている。

朝鮮半島は南北分断体制であることに加え、大国の利害が交錯する地政学的条件を持つために、それ自体が「国際的研究」にならざるを得ない側面がある。その意味で、韓国外交に関する研究は、公開される韓国政府外交文書を十分に活用しながらも、多国間の外交史料を分析することによって、さらなる発展が望まれる分野である。本号の特集が、こうした研究発展の契機になることを期待したい。

- (1) 韓国政府外交通商部(旧外務部)外交文書に関しては、韓国外交史料館などで、マイクロフィルム(一部はマイクロフィッシュ)(1978年分まで)、および、PC上のドキュメントファイル(1979年分以降)で閲覧および複写(紙への複写だけでなくPCにドキュメントファイルとして直接複写することも可能)することができる。また、外交文書目録に関しては、以下の外交史料館のウェブサイトアクセスすることによりダウンロードすることが可能である。<http://cafe.naver.com/diplomaticarchives>。目録のキーワード検索も可能である。但し、文書自体は直接訪問して閲覧する必要がある。
- (2) ここでは、全てを取り上げることはせず、特集論文で参照されていない代表的なものとして、以下の5人のものを紹介するにとどめる。①金溶植『희망과 도전: 金溶植 외교 회고록』(『希望と挑戦: 金溶植外交回顧録』) 서울(ソウル)、東亜日報社、1987年; 金溶植『새벽의 약속: 김용식 외교 33년』(『夜明けの約束: 金溶植外交33年』) 서울, 김영사(ソウル、

キムヨン社)、1993年;②金東祚『回想30年韓日會談』서울(ソウル),中央日報社、1986年(林建彦訳『韓日の和解:日韓交渉の14年の記録』サイマル出版会、1993年);金東祚『冷戦時代の 우리 外交:回想80年 金東祚 전 외무장관 回顧錄』(『冷戦時代のわが外交:回想80年金東祚前外務長官回顧錄』)서울(ソウル)、文化日報社、2000年;③朴東鎮『길은 멀어도 뜻은 하나』(道は遠くとも志は一つ)서울(ソウル)、東亜出版社、1992年;④盧信永『盧信永 回顧錄』서울(ソウル)、高麗書籍、2000年;⑤崔浩中『鈍馬가 山頂에 오르기까지:최호중 회고록』(『鈍馬が山頂に登るまで:崔浩中回顧錄』)서울、태일출판사(ソウル、テイル出版社)、1997年;崔浩中『빛바랜 榮光속에 後悔는 없다:최호중 회고록』(『色褪せた榮光の中で後悔はない:崔浩中回顧錄』)서울(ソウル)、三和出版社、1999年;崔浩中『外交는 춤춘다』(『外交は踊る』)서울、한국문원(ソウル、韓国文苑)2004年。

- (3) 例えば、大統領に限ってみても、盧泰愚、金泳三、金大中、盧武鉉の各大統領は、何らかの形で回顧録もしくは自伝を刊行している。盧泰愚『노태우 회고록 上卷—국가, 민주화, 나의 운명』(『盧泰愚回顧錄 上卷—國家、民主化、私の運命』)『노태우 회고록 下卷—전환기의 大戰略』(『盧泰愚回顧錄 下卷—轉換期の大戰略』)서울、조선뉴스프레스(ソウル、朝鮮ニュースプレス)、2011年;金泳三『민주주의를 위한 나의 투쟁 김영삼 대통령 회고록 상·하』(『民主主義

のための私の闘争 金泳三大統領回顧錄 上·下』)서울(ソウル)、朝鮮日報社、2001年;金大中『김대중 자서전 1·2』(『金大中自叙伝 1·2』)서울、삼인(ソウル、サムイン)2010年(波佐場清・康宗憲訳『金大中自伝Ⅰ:死刑囚から大統領へ 民主化への道』、『金大中自伝Ⅱ:歴史を信じて 平和統一への道』岩波書店、2011年);盧武鉉『성공과 좌절:노무현 대통령 못하든 회고록』서울、학교재(『成功と挫折:盧武鉉大統領書けなかった回顧錄』、ソウル、ハッコジェ)、2009年;노무현재단 余음 유시민 정리『운명이다:노무현 자서전』서울、돌베개(盧武鉉財団編 柳志敏整理『運命だ:盧武鉉自叙伝』ソウル、石枕)、2010年。また、特に、大統領側近として外交に深く関与した官僚もしくは政治家として朴哲彦、林東源、丁一權などの回顧録を取り上げることができる。박철언『바른 역사를 위한 증언:5공, 6공 3김시대의 정치비사 1·2』서울、랜덤하우스중앙(朴哲彦『正しい歴史のための証言:第5共和国、第6共和国、三金時代の政治秘史 1·2』ソウル、ランダムハウス中央)、2005年;임동원『피스 메이커:남북관계와 북핵문제 20년:임동원 회고록』서울、중앙books(林東源『ピースメーカー:南北関係と北朝鮮核問題 20年:林東源回顧錄』ソウル、中央ブックス)、2008年(波佐場清訳『南北首脳会談への道:林東源回顧錄』岩波書店、2008年);丁一權『丁一權回顧錄』서울(ソウル)、高麗書籍(株)光明出版社、1996年。